

夢は無限(夢限)に夢中

第7号

令和7年6月27日 文責：大谷

夢は無限(夢限)。いざ第二章へ

去る六月二十一日と二十二日(陸上競技は二十八日)、阿蘇郡市内の各地で令和七年度阿蘇郡市中学校総合体育大会夏季大会が開催された。梅雨の最中でもあるため、例年屋外競技は天候に悩まされてきたが、今年は天候にも恵まれ、各競技で熱戦が展開された。

できれば全競技の応援に駆けつけたかったが、時間の都合上わたしは初日のバレーボールと軟式野球そしてバドミントン会場に足を運ばせていただいた。バレーボール会場では、開会式直後の女子の第一試合、対小国中・南小国中との一戦を応援した。立ち上がりは緊張からか、やや硬さが見られ連続で失点してしまったものの後半は本来の粘り強いプレーを取り戻したが、一歩及ばなかった。試合後、涙する選手たちだったが、仲間と笑顔で声を掛け合う姿が清々しかった。会場を発つ前に試合を控えた男子バレーボール部の選手たちに声をかけた。「女子の分も頑張ります！」そう言ってくれた選手たちが、何とも頼もしく思えて嬉しかった。

軟式野球が行われている西原村民グラウンドに到着した。既に産山学園との試合が始まっていた。どうやら初回に先制したらしいが、わたしが着いた途端ピンチに。しかし、粘り強い投球と堅守で何とか0点に抑えることができた。その後も、緊迫したゲーム展開が続いたが、両チームとも集中力の高い引き締まった試合を展開した。「きっと勝ってくれるはず！」そう願いつつ、同じく西原村で行われていたバドミントン会場へ急いだ。

ちようと男子団体戦、小国中との対戦の真最中だった。三面同時に試合が行われていたため途中経過が分からなかったが、試合後の選手たちの様子から結果は見取れた。先日、放課後にバドミントン部が練習している第二体育館へお邪魔したとき「もうちよつとみんなと(バドミントンを)やってほしい」と言っていたある三年生の言葉を思い出した。「まだ明日がある」翌日の個人戦での奮起を祈り、会場を後にした。

二日目は剣道競技の役員として、本校剣道部の選手たちの一瞬たりとも隙が許されない「一足一刀の間合い」に息をのむ一日を過ごさせていただいた。特にライバルである高森中との一戦は、男女とも実力伯仲の攻防で、呼吸すら忘れてしまうほどだった。「こんな試合を一日に何試合も…」南中剣士たちに改めて敬服した。南中生って、凄い。両日を通じて凄い人たちとともに過ごしているのだな、と改めて実感しながら家路についた。

「校長先生、野球が優勝したそうですよ！」

剣道会場で昼食をいただいているとき、同会場に同席していた村教育委員会の方からこんな朗報が飛び込み、役員席は一時歓喜に沸いた。部員数が少なく、三校合同という必ずしも恵まれた環境とは言えない中で、真摯に野球に取り組んできた選手たちの思いが結実した。心から栄誉を讃えたい。

「官職・地位をやめること。現役から退くこと。」(例示「政界を『する』」辞書に「ある言葉」の意味が、こう記されていた。さて、この言葉とは？多くの三年生にとっては、今大会をもって一区切りを迎えたことだろう。しかし、君たちは、まだ十五歳だ。これから高校もあるし、未来は無限である。だから「やめる。退く」という意味を持つこの言葉は使わずに、常に新しい夢に向かって夢中であって欲しいと願う。さて、次は県大会。自分のそばに夢に夢中になる仲間がいる限り、南中は夢への挑戦を誰一人〇〇しない。

■先日の引き渡し訓練や阿蘇郡市中学校総合体育大会夏季大会等、お忙しい中ご協力いただき誠にありがとうございました。1学期も早いもので残すところ3週間程となりましたが、授業参観や除草作業等もごございますので、引き続きどうぞよろしくお願い申し上げます。